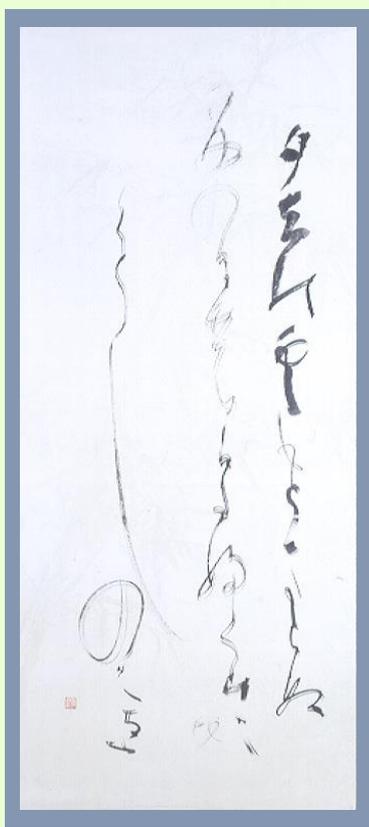




《氷心玉壺》1988年

“割れた線”の魅力

やわらかい毛筆を一气呵成に揮う書の制作では、途中で筆の毛先が割れてしまうことがあります。上條信山は、多くの場合、割れて書きづらくなった筆先をあえてそろえ直すことをせずに書き進めます。割れた毛筆による線は、ややもすると、ばらついた貧弱なものになりますが、信山作品の割れた線には微塵の弱さも感じられません。割れた筆先でありながら、生きた線を引くにはどうすればよいのでしょうか。また、割れた線により、どのような効果が生まれているのでしょうか。信山書法による“割れた線”の魅力を探ってみましょう。



《式子内親王のうた》1986年



《大道無門》